Japanese Association for Religious Studies

の頁のように水平方向に返して裏面を読む。それは当時アッシリア王が領土内に立てた「王の石碑」のように立てて読むものと考えられる。アッシリアの最大版図を達成したエサルハドンは、貴重な石材ではなく、入手しやすい粘土をマス・メディアとして、アッシリア統治権を誇示するプロパガンダを行った。またその本文中で、アッシュルの印章が押されたその粘土板をそれぞれ自分たちの神のように「崇敬」するよう命じたことは、アッシリア国家宗教の中枢ではあるがローカルな神であったアッシュルのグローバル化を図ったとみられる。前六一二年のアッシリア滅亡に加担したメディアの施政者たちが、この文書をカルフで砕いたのは「天命の書板」が持つ呪力を恐れたためであろう。そのようにこの文書は法、宗教、政治など諸領域の意味合いが絡む文書であった。

ヘブライカ・ウェリタスのロジック
――ヒエロニュムスの聖書理解――

加藤哲平

ヒエロニュムス（三四七―四二〇）は、ウルガータ聖書を作り上げた古代教父である。この翻訳が画期的だったのは、旧約部分に関して、ヘブライ語原典から直接ラテン語訳されたことである。というのも、当時のキリスト教徒にとって旧約とは、ギリシア語訳の「七十人訳」であり、またそれをラテン語に重訳した「古ラテン語訳」であったからである。七十人訳は、『アリステアスの手紙』によると、プトレマイオス二世フィラデルフォスによってエルサレムから招聘された七二人の長老が七二日間で訳したものだという（モーセ五書部分）。一方古ラテン語訳は、七十人訳を底本として後二世紀頃から徐々に訳されたものだが、翻訳として精度が低く、改訂の必要があった。そこで教皇ダマススの命を受けたヒエロニュムスは古ラテン語訳の福音書と詩篇を改訂し、続けていくつかの七十人訳文書をラテン語訳した。しかし青年期からヘブライ語を学んでいた彼にとって、古ラテン語訳も七十人訳も共に、原典に対して多くの誤りを含んだものでしかなかった。そこで彼はすべての旧約文書をヘブライ語からラテン語訳するという一大事業に乗り出したのである。その際に彼が標榜したのが、「ヘブライ語の真理」（Hebraica Veritas）であった。

従来のヒエロニュムス研究では、この言葉は漠然と七十人訳に対するヘブライ語原典の優位を指していると捉えられてきたが、本発表ではそれを一段深く掘り下げたい。そこで発表者は、三九五年に著された『最善の翻訳法について』（書簡五七）を取り上げた。この中で、彼は新約内で旧約の一節が翻訳・引用されている部分を一二箇所取り上げ、そこにどのような翻訳上の問題があるかを検討している。発表者の分類では、①新約・ヘブライ語原典・七十人訳がそれぞれ異なるもの、②新約のみ異なるがヘブライ語・七十人訳は一致するもの、③新約・ヘブライ語は一致するが七十人訳のみ異なるもの、④新約の引用元表記の誤り、⑤その他の誤りとなる。彼は、③の場合は新約記者がヘブライ語から直接ギリシア語訳して引用した

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

（＝ヘブライカ・ウェリタスに従った）ために起こったとする。

ではなぜ七十人訳は新約・ヘブライ語と異なる場合があるのか。ヒエロニュムスは『五書序文』において、先の『アリステアスの手紙』を敷衍している。すなわち、王はユダヤ人が自分と同じ「唯一なる神」を信奉していると聞いて長老たちを歓待したが、王の神とは実際には「プラトンの神」であった。そこで誤解に気づいた長老たちは、王に悟られぬよう聖書の文言を改変したのである。なおかつ旧約の文言には本来キリスト到来の預言＝真理が隠されているはずであるが、改変に伴ってそれも七十人訳から取り去られた。しかし前述のとおり新約記者は直接ヘブライ語から引用したため、その真理を保存している。それゆえに③が最も重要になる。一方で②は問題とならない。なぜならば彼にとって最終的に重要なのは旧約よりも新約なので、いくらヘブライ語と七十人訳が一致しようとも、新約の誤りは非難されない。つまりヘブライカ・ウェリタスとは常にヘブライ語こそ正しいという言説ではなく、あくまで新約がヘブライ語と一致するときにのみ成立するのだ。また彼が未検討なものとして、新約と七十人訳は一致するがヘブライ語のみ異なる、という場合が考えられるが、これは右の理由から成立しない（同様に、新約・ヘブライ語・七十人訳がすべて一致する、という場合もあり得るが、これはそもそも問題にならない）。

以上をまとめると、ヘブライカ・ウェリタスのロジックとは、一、七十人訳では失われてしまったが、もともとのヘブライ語には含まれているキリストの預言（真理）を、ヘブライ語に立ち帰ることで再び取り戻すこと、二、その際新約聖書中の引用とヘブライ語が一致していること、といえる。

中世ユダヤ教における「イスラエルの地」

志田雅宏

ユダヤ教では、神殿の崩壊およびユダヤ人の離散によって、「イスラエルの地」が、古代の神殿祭儀の場所から、聖典解釈によって議論される主題へと移行した。聖典には「イスラエルの地」が聖なる土地であることや、そこへの移住を命じる記述がある。それらの記述が解釈されるとき、ユダヤ教では「離散をどう意義づけるか」という問題が常に念頭に置かれた。ラビたちは、「イスラエルの地」について語ることが、離散におけるユダヤ教実践の意義を損なうことのないよう努めたのである。

タルムード「ケトゥボット」篇では、「イスラエルの地」に関してさまざまな主張が述べられる。だが、その移住に対しては慎重な姿勢が保持されていった。そこでは、移住は将来、メシアの到来によって実現されるべきものとされた。中世ユダヤ教では、聖書やタルムードを解釈することで、「イスラエルの地」とメシアニズムが関連づけられていく。また、離散におけるユダヤ教実践が、将来「イスラエルの地」に住むことよりも大きな意義を持つと主張する者もいた。

十三世紀のスペインのユダヤ人指導者であるナフマニデスも、一二六三年のキリスト教徒とのメシア討論でそのような態

NII-Electronic Library Service